



TITLE:

3)「研究開発コロキウム」報告(グローバルCOE)：教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究

AUTHOR(S):

菊澤, 聖子; 高橋, 洋一; 須賀, みな子

CITATION:

菊澤, 聖子 ...[et al]. 3)「研究開発コロキウム」報告(グローバルCOE)：教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究. 研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2009: 78-87

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143111>

RIGHT:

教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究

菊澤 聖子・高橋 洋一・須賀 みな子

1. はじめに

科学技術と現代医療の高度な発展により、人間の誕生や死の風景はずいぶんと様変わりしてきた。昔は自宅の畳の上で家族や親しい人たちに見守られながら死んでいくということがごく普通であったのが、今では病院で科学技術の管理のもと死を迎える人がほとんどである。このことは誕生の場面についても同様である。確かに科学技術の発展により平均寿命は延び、様々な危険性を軽減することができるようになってきたという意味において、実際私たちは多くの場面でその恩恵を受けていると言える。しかしその一方で、生命倫理に関わる医療介入の境界設定の問題や死生観の問い直しといった新たな問題領域が生じているのも事実である。教育の場面においても「いのちの尊厳」を教えることが求められるようになった。このような状況の背後にあるのは、もう少し広げて言えば「幸福観」の問い直しであるようにも思われる。

このようなことから、私たちは生や死を、あるいはまた幸福をどのように語っていくことができるのかという問題意識を持ち、大きく三つの観点からのアプローチを試みた。一つ目は西洋における幸福観の思想的背景を踏まえた上で、「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いの枠組みに回収されないような死生の、幸福の語りを模索するものであり、二つ目は医療における幸福感を、健康／病あるいは死生といった概念との関係性に注目しながら、人間の知恵として語り直すことを試みるものであり、三つ目は「子ども」と「幸福」に関わる言説の分析から「幸福」の語りの新たな可能性を追究するものである。以下に、研究報告としてそれぞれの論考を収める。

2. 研究報告

(1) 生きること、死ぬことへの問いの起点（菊澤聖子）

近年、「いのちの教育」といった標語が掲げられることは、「いのち」が「ないがしろにされる」ような時代、「意味」や「目的」を見出すことの難しい、「生きにくい」時代であると捉えられていることを端的に表している。90年代頃から「なぜ生きるのか」、

「何のために生きるのか」というような生や死にかかわる問いがメディア等でもしばしば取り上げられるようになってきた。このような問いが「真正面」から取り上げられ、教育に携わる者がそれにどう対応していけばよいのかと「真正面」から頭を悩ませる様相は、生や死というものがわたしたちの生活の身近にあり、「真正面」から問わなくとも人が日常を生きていく中で、おそらくその見方や考え方を知らず知らずのうちに身につけていくようなものであったのが、「教え」ないとわからないという状況になってきていることを暗示している。実際、多くの人が自宅ではなく病院という空間において誕生と死を迎えるようになり、生や死は家庭や地域の日常生活から切り離されて病院という近代的な空間で「管理」されるようになった。さらに誕生や死に関わる文化的儀礼が消失したり、形を変えたりする中で、人間がどのように生まれ、そしてどのように死ぬのかということが見えにくくなってきていると言える。このような時代にあって「いのち」を標語として掲げて「教える」必要があるというわけである。

このような状況は、ある種の飽和点を迎えた、悲観すべき「不幸」な状況であるようにも思える。相対化の果てに、判断の拠り所となる倫理的な基準は崩壊し、人々はもはや「幸福」を語る言葉をもたない。哲学の領域においては「幸福」は伝統的には一つの大きな主題であったにもかかわらず、今や「時代遅れ」で「死語」であるようにも思われる。しばしば言われる現代における幸福論の不在は、このような現代の状況を象徴することのようでもある。三木清は「幸福について」という短い文章のなかですでにこのように述べていた。「健全な胃をもっている者が胃の存在を感じないように、幸福であるものは幸福について考えないといわれるであろう。しかしながら今日の人間は果たして幸福であるために幸福について考えないのであるか。むしろ我々の時代は人々に幸福について考える気力をさえ失わせてしまったほど不幸なのではあるまいか。」

＊

プラトンが『饗宴』において、人は欠けているものを欲求するのであって、現に所有するものを欲求するのではないとソクラテスに語らせ、また『ピレボス』において、快樂を欠乏しているものの充足とする見方を提示して以来、このような捉え方は、西洋における幸福観にも大きく反映されてきたと言える。西洋では、幸福はしばしば、主体が欠乏しているものを欲し、それを所有すること、充足させることとして捉えられてきた。このことはプラトンやエピクロスに限ったことなく、たとえばパスカルやショーペンハウアーの幸福をめぐる考察も、このような欠乏したものへの欲求とその充足というモデルの上に立っていると言える。

少し考えを巡らせてみるならば、このような幸福観がわたしたちの現代の生活のなかにもさまざまな形をとって浸透しているものであるということは想像に難くない。学校教育の場面では、わたしたちは現状に満足するのではなく、欠けているもの（こと）を見出し、それを新たに獲得し、充足させることを「目的」として「努力」をすることによって「前進」・「発展」・「成長」していくということを教えられてきた。そして、それ

はしばしば「よき」こととして「幸福になること」と結びつけて語られてきただろう。さらには限られた時間のなかでどれだけ速く、効率よく「目的」に達することができるかということを考え、多くの場合、その「目的」を基準としてあらゆる他の行為が「有益」であるか否かを判断しながら生活しているということからも、このような思考様式が現代において支配的であることがうかがえる。

言うまでもなく、このような思考様式の背後にあるのは、現段階を欠けている状態、不完全な状態として捉える見方である。現在の状態とは「別の」状態に「完全性」を認め、その「完全性」を基準として現在を測り、現在の「不完全」な状態をその「完全性」と比べては「完全性」へと向けて運動するというのが、人間の、あるいは社会の「前進」・「発展」・「成長」にとって重要なものであると考えられてきた。このような見方においては、「目的」は到達すべき「完全性」として定められるのであり、そのことによって「目的」から逆に、現在の行為を「主体」が組織していくことが可能となる。そして、今なす行為はすべてその「目的」に照らし合わされることによって「役に立つ」、あるいは「役に立たない」という形で評価される。役に立つか立たないかということは、行為を現在において見るのではなく、しばしば未来において達成されるべき「目的」との比較において位置づけられるのである。

ところで、冒頭で挙げた「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いも基本的にはこのような見方の上に成り立っている問いであるように思われる。というのは、この問いは「生きる」ということとは「別の」何らかの理由や目的を要請するものであって、それとの関連において「生きる」ということを意味づけ、評価しようとしているからである。

「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いは、しばしば「いずれ死ぬのになぜ生きなければならないのか」ということを含意している。死という「時間的な終点」があり、結局「無に帰する」のであるならば、「わたし」のこの生は何の役に立つのか、何の意味があるのか、というわけである。しかし、このような問いの背後にある死生観——生という始点と死という終点があり、その間の時間を生きた暁には「わたし」の生は消滅すると捉え、ネガティブに捉えられた「死＝無」という終局から「生」の価値を測ろうとする死生観、さらに「死」が「無」であるならばそれに代わる意味や目的を求めようとする死生観——とは異なる死生観について考えてみてもよいのではないか。なぜなら、「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いは、逆説的なことではあるが、もはや近代において支配的であった前進・発展モデル——行為の「外」にある「目的」を目指して邁進し、その「目的」からあらゆる行為の価値判断をする見方——が行き詰まりを見せるなかで、「～のために」と答えられない状況があるからこそ出てきた問いであるように思われるからである。

＊

ここで、次のようなことを思い出してみてもよいのかもしれない。つまり、わたした

ちは自らの意志によって生まれてきたのではないということを、である。わたしたちは、気づいたときにはもうすでに生まれてしまっている。このことは、「生きる」ということが「わたし」という主体の力の範囲内にのみ収まるようなものでは決してなく、超越的なものを含みこんだものでもあるということを表している。わたしたちが理由や目的を必要とするのは、しばしばその行為が「わたし」という主体の行為であり、「わたし」がその目的に向かって行為を組織化していくことができるという考えに基づいているからである。

荒木博之は、『やまとことばの人類学』において「自発」「受身」「可能」「尊敬」の四つの意味を持つ日本語の「る」「らる」「れる」「られる」について、「可能」「受身」の意味と「自発」の意味との境界が曖昧であることを指摘しているが、このことからわたしたちは、「生まれる」という語の「れる」も「受身」であると同時に「自発」でもあるようなものとして考えてみることもできるだろう。「受身」というと、一般にその行為に対して、主体とは切り離された他の動作主がいて、その動作主によって主体が何らかの影響を及ぼされることだと捉えがちであるが、日本語の「受身」においてはしばしば動作主を捨て去った形で現れるため、同時に「自発」の意を含むと取ることもできるのである。「受身」であり「自発」であるということは、ある行為が主体の行為か、あるいは他者の行為かという二者択一ではなく、自と他の区別が曖昧であり、自と他のあいだで「自ずから」そうなるというようなものである。あるいは、自と他とを同時に含みこんだ状況の記述として考えることもできるかもしれない。

「生きる」ということを、「主体が自らの意志によって生きる」という側面からだけでなく、「受身」でもあり「自発」でもあるようなものとしての「生まれる」ということとあわせて考えてみてもよいのではないだろうか。このように考えてみたとき、生きることや死ぬことを、「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いの枠組み——「わたし」という主体が理由や目的に依拠して、その目的との関連であらゆる行為を組織化していくという見方——に必ずしも還元されるようなものではないものとして見ることもできるのではないか。生きることや死ぬこと、さらには幸福の問題については、このような側面を決して見落としてはならないだろう。例えば、「生きる」ということを、単純に生という始点と死という終点とによって区切られた線分を、生「から」死「へ」と、欠如したものを主体に取り込みながら生きることとして捉えるのではなく、今生きているということが、すでに「目的」であり「完全性」であるようなものとして考えることもできるのではないか。わたしたちは、自と他を含みこんだものとして今生きているというところから、考え始めるべきなのかもしれない。

(2) 幸福感と健康／病 —医療における幸福感をめぐる（高橋洋一）

本研究報告では、医療において近年特に注目されている QOL (Quality of Life) にみられる「幸福感」について、「健康」や「病」といったこれまで医療と深くかかわ

ってきた概念との関係に注目することから考察する。

・ Quality of Life と「幸福感」

従来の医療においては、「幸福感」が表立って問われるということはあまりなかったのではないだろうか。なぜなら、これまでの医療においては、予後など医学の専門的見地からみて最善であると考えられることが、患者にとっての幸福であるという前提があったと考えられるからである。すなわち、患者の治療方針ひとつをとっても、科学的かつ客観的であるとされる医学的な価値に基づいた決定や判断を受け入れることが、患者にとっての幸福につながると考えられていたのである。

しかし近年になって、医療が高度化また多様化するにつれて、患者自身がどのような生き方を価値が高いものとして考えるのか、あるいは自分のライフスタイルをかんがみたときにどの治療法が望ましいのかといったように、治療方針や方法の決定にあたって患者の主観的な判断が重視されることになった。こういった流れのなかで、Quality of Life (以下、QOL) の概念が、病院や他の医療機関において広く流布することになった。QOL は生命・医療倫理学の領域において「生命の質」あるいは「生活の質」と翻訳されることが多いが、医療現場においては先に述べたような患者本人の主観的な満足度として一般的に捉えられているようである。この点で QOL の概念は、医療における患者の「幸福感」の指標としての役割を担っているといえるであろう。

・ 医療における QOL の問題点

以上のような経緯のもとで、特に患者の今後の生に深くかかわるような決断が求められる医療場面においては、医療者の価値判断だけでなく患者の QOL に細心の注意が払われることになった。そこでは、これまでの医療において前景化することのなかった患者の満足感や幸福感にかかわる問題が生じてきたのである。それでは、医療者は患者の QOL をどのようにすれば理解することができるのであろうか。この問いにこたえるべく、近年 QOL についてのさまざまな測定方法が開発されてきている。また実際の医療においてもこれらを利用することで患者の QOL を把握しようとする試みがなされている。そこでは、QOL が効用値 (utility) として、完全に健康な状態を表す「1」から死亡を表す「0」に至るまでの数値としてとして尺度化される。この尺度を基本として、自らの現在の状況、あるいは何らかの医学的処置を行った場合に予想される状況に対する満足度が 0 から 1 のあいだの数値として評定されるわけである。たとえば、事故に遭って自力歩行ができなくなった状態は 0.5、何らかの手術を行うことで、行動が制限されることになる状態を 0.7 といった具合である。この数値の大小は医学的に定義されるものではなく、患者自身の自らの状態についての満足感から決定されるものである。ので、治療方針の決定にそれぞれの患者の QOL を反映させることができると考えられている。

このような測定方法においては確かに患者の満足感、あるいは幸福感の一面をとらえることが可能かも知れない。この発想のもとで、QOL の数値をより高くすることが、それぞれの患者の幸福な生活を実現することにつながると考えられるわけであるが、この点に注意を払う必要がある。松原洋子は「医療のリスク論 QOL とは何か」において、このような発想を「幸福な生活の実現という誤解」とであると指摘している。「医療側は患者の生活全体を受容するという観点では捉えずに、より幸福な生活を保障することだとみるわけです。患者のニーズを満たすためには、より幸福な生活を実現することだと医療側は読み替えてしまうわけです。患者側の捉える QOL と医療側の捉える QOL が、そもそもずれてしまっているのですね」。ここで述べられるように、医療側が患者のニーズを幸福な生活を実現することと読み替えることで、患者側の QOL とのあいだでずれが生じてしまうのはどうしてであろうか。この問いに対する答えは、「幸福な生活」あるいは「幸福」の概念と、「健康（あるいは生）と病（あるいは死）」の概念との関係性から導き出されるように思われる。ここで、前者を「幸福感をめぐる軸」、後者を「死生をめぐる軸」として考えると、医療者側においては、「幸福感をめぐる軸」が「死生をめぐる軸」と密接に重ね合わせられるかたちで考えられていることに気がつく。完全な健康（生）と死のあいだで自らの QOL を効用値で定めるという発想、そして病を経験することで QOL が下がり、病から回復することで QOL が上がる、そして死を迎えるにあたって QOL が 0 になるという発想の背後には、「健康（生）であれば幸福である、病（死）は不幸である」といったように、「幸福感をめぐる軸」と「死生をめぐる軸」のあいだに強い比例関係が読み込まれているのである。しかし、「幸福・不幸」の問題と「死生」の問題を以上のような相関があるものとして素朴に考えてしまっているのだろうか。

・幸福感にみる人間の「知恵」

無論、健康であるに越したことはなく、病が治ることを望まないことはないであろう。しかし、健康になることや病が治ることだけが生活の質の向上、あるいは幸福であるといえるだろうか。この点にこそ「幸福感をめぐる軸」と「死生をめぐる軸」を重ね合わせる思考様式が見落としている、幸福感をめぐる人間の知恵が息づいている。しばしば指摘されることであるが、たとえ重篤な病を患う者であっても、その QOL は必ずしも低いというわけではない。このように、病にあってもそのなかで自分なりに折り合いをつけることで幸福にもなりうる、松原は先の引用に続けて以下のように述べている。「生まれてくることの不条理、死ぬことの不条理、あるいは病気や障害を持つことも不条理だとすれば、その不条理をどう飼いなすか、どう折り合いをつけるか、それが人間の知恵なんじゃないかと私は思っているんです。そして、QOL みたいなものも、そういう主観的な観点から考え直してみると、医療側が考える QOL だけでは捉えきれない人間の知恵の部分が出てくるんじゃないかという希望を持っているんです」。自らに与え

られた状況を0から1の数値で表される固定されたものとして捉えるのではなく、その状況をどのように飼いなすのか、折り合いをつけるのか、M・ド・セルトーが「なんとかやっていくこと」として描き出した人間の知恵がここにあるのではないだろうか。

(3)「幸福」をめぐる「子ども」の諸相(須賀みな子)

「子ども」というものが、大人とは違う特別な存在として眼差されて以降、それはしばしば「幸福」というものと結び付けられて語られてきました。「幸福な子ども時代」というようなフレーズが、目の前にいる子どもや、自らの子ども時代を指して語られるとき、私たちは特にそのような語りに不自然さを感じることはありません。また、近代的な子ども観を象徴することとなった、「童心」「純真」といった言葉も、しばしば子どもに「幸福な存在」というイメージを植えつけてきました。日本における、創成期の児童文学などを見ても、子どもの言動の朗らかさ、そしてそれを取り巻く大人の眼差しの暖かさが強調されるか、あるいは逆に、冷酷な社会や大人の中で生き抜く子どもを描くことで、対照的に発せられる子どもという存在の幸福さが引き立つようなストーリーが、典型的な型として確立されてきました。このような児童文学を読む親や教師が、しだいに目の前の子どもを、「幸福」に生きることを守られるべき、特別な存在として「子ども」を見つめはじめたことは、その後の、児童文学のさらなる興隆やさまざまな子ども用品の登場などからも読み取ることができます。

では、このような子どもを大人とは異なる特別な、そして殊に「幸福な」あるいは「幸福であるべき」存在であるとする見方を、「近代(教育学)の産物」として一蹴することもできる現在の私たちは、もはや「子ども」と「幸福」というイメージの結びつきそのものを、切り離し得たのでしょうか。

子どもを得た親は、自分たちの身のまわりに人間が確実にひとり増えていることの驚きとともに、さまざまな偶然をかいぐつてきた「幸運」にも近い「幸福」を感じるでしょうし、その子どもに何を願うかと言えば、おそらく「幸せ」を願うでしょう。また、妊娠・出産・育児という事柄が、「常ならぬ」現象として位置づけられ始めてからは、それぞれの状況にある読者をターゲットにした雑誌等のメディアが、毎月数十種も発刊され、そこで「幸福な妊婦生活」「幸せなお産」「幸せな子育て」を謳います。その内容は、妊娠中の身体の細かな変化や、お産のときにあると便利なグッズ、母乳育児をスムーズにするための産婦の食生活や、その後の離乳食の簡単な作り方等々・・・非常に具体的で実際的なことを論じるもので、「妊娠」「出産」「子育て」そのものの「幸福」を論じるものではありません。しかし、子どもにまつわるそのような、具体的で小さな事象自体がすでに、子どもにまつわる「幸せ」の萌芽として、しきりに関係付けられているのです。もはや「幸福」は、「子ども」の内に見出されるイメージというだけではなく、子どもに関わる親や家族、社会の構成員が、意識的に作り出して、自らや子どもに「与える」ことのできるもの、そしてそうすべきもの、として捉えられており、「幸福」は

「子ども」との結びつきをより強固にしていると言えるでしょう。

とは言え、実際に子どもとの生活が始まると、「幸福」のシンボルとしての子ども像はあっさり裏切られます。彼らは、人が「幸福」に対して抱くような、快感や充足感や安らぎといったものを見る人に与えることもしなければ、また自身がそれを表現することもほとんどないように見えます。快感の表明よりはその欠乏を主張し、充足感に包まれることよりはその継続を身体を張って訴え、静かな安らぎに身をゆだねることよりは、次の刺激を生み出すことに必死です。彼らの日常は、泣き、叫び、走り回り、機嫌を損ね、自分以外の人間の要求を退けることによって成り立っているとも言えるほどです。また、彼らは「手を抜く」ということをしていないように見えます。気になったものは、誰の制止でも振り切って近づいていって見入り、飽きるまでいくらでも見つめたり手でもてあそんだりし続けます。また、気に入った絵本やお話は、たとえ読む大人にとって新鮮さを欠くものとなっても、何度も何度も繰り返しを要求します。言葉によって自分の疑問を質問をするようになると、見るもの全てに対して言っているのではないかと思われるほどに、「これ何?」「何で?」「どういう意味?」と言い続けます。程よいところで「手を抜く」という技術に馴染んだ大人にとって、子どもに関わるということは「幸福」よりも、面倒くささや疲労といったものと付き合うことになるのではないのでしょうか。

このような日常にさらされる中で、メディアによって先取りしていた、子どもとの生活の幸福さのイメージと、自分の育児、自分の子ども、そして自分自身が重ならなくなったときに、今度はそのような「悩める親」を受容する媒体が、それこそ「スポック博士」や「松田道雄」といった「原典」的な育児書から、ネット上の育児相談にいたるまで、数え切れないほどに用意されています。上にあげたような、「原典」的な育児書が、小児医学や栄養学をベースにした、子どもの病気や体調不良といったものの原因の解決をその主目的としたものであり、辞書や教科書を読むような感覚を起こさせるものに対して、近年になって出版される育児書になればなるほど、親の心配事や悩みを「共感」し、「幸福」な育児から一度ドロップアウトしてしまっても、それもまた幸せな育児の糧となり、こうすれば再び親も子どもも「幸福」に戻ることができる、というメッセージを発しているものが増えてきていると言えるでしょう。ここ数年間、シリーズ化されて非常に人気を得ている育児書が、漫画仕立ての『子育てハッピーアドバイス（明橋大二 1 万年堂出版 2005）』というタイトルの本であることも象徴するように、「子ども」そのもの、そして子どもと過ごす人々は「幸福」であるということが、先取りのイメージとして、そしてそのイメージからの脱落という事態そのものまでもが、「幸福」なものとして意味づけられている、と考えることができるでしょう。

このように、「子ども」と「幸福」の結びつきは「近代（教育学）の産物」である、ということを既に自明の理として受け取ることでできる現代にあっても、ますます「子ども」と「幸福」の結びつきは強化され、そしてその結びつき方は周到に張り巡らされ

てきていると言えるのではないのでしょうか。

一方で、このような子ども観に対してそのフィクション性を指摘し、子どもを大人とは異なる秩序を持った「他者」として、「幸福」な子ども観とは異なる新たな、独特の子ども像を提起する思想が確立されてきていることも確かです。そのように子どもを「幸福」といった肯定的なイメージから解放された、独特の「他者」として見なす思想は、子どもの見せる日常的な振る舞いを受容し、理解することの助けにもなります。「他者」として子どもを見なすことで、子どもの前に置かれた人間は、そこに無理に「幸福」を探し出すことの困難を避けることもできます。

しかし、ここで考えてみるべきなのは、子どもと幸福の結びつきが、単なる近代の産物であるという側面があったとしても、そして近年の諸雑誌がその先導的な役割を担って子どもの周りの人間に子どもという存在と幸福を結びつけさせ、その現実的な破綻を育児書が事後的にまたカバーしていく、ということがひとつのからくりに見えたとしても、そしてまた「他者」として子どもを見なすことで「幸福」な子ども像を描き直したとしても、それでもなお、子どもの見せる振る舞いに、幸福を感じるのはなぜなのか、ということです。たとえ、日常的な物事が引き起こす疲労感のほうはずっとたくさん感じるにしてもです。子どもの振る舞いの「何が」私たちに幸福な気持ちを引き起こすのか。この「何が」ということはあまり論じられてはこなかったのではないのでしょうか。

子どもという存在を大人とは異なる独立した存在として大人と切り離すことに、「幸福な子ども」というイメージや、そして「他者としての子ども」という見方は貢献してきました。しかし、大人と子どもとが関わり合いながら繰り広げられる日常生活のなかで、子どもと大人というものを繋ぐもの、としてこの「幸福」というものを見ていくこともできるのではないのでしょうか。むしろ私たちが子どもの振る舞いに何か幸福を嗅ぎ取るとき、それは大人や子どもといった役割や区分を超えて、「人間」というものの幸福とはどのようなものなのか、を考える助けとなるようなものなのかもしれません。そのためには、子どもという「存在」の特殊性やそのイメージを見ていくことよりも、子どもが見せる「振る舞い」そのものや、具体的な「現象」そのもののいったい「何が」、見る人に「幸福」を呼び起こすのか、を見ていくことが必要となるでしょう。

これは確定することのとても困難な作業となるでしょうが、そのひとつにはあるだろうと思われるのは、子どもが見せる「やるべき時にやるべき事をやっている」という姿です。「欲求と行動の調和」と言ってもよいかもしれませんが、朝起きてから寝るまで繰り広げられる様々な「遊び」において、全く迷いなく対象を選び取り、そこに没頭しきって、突如すっきりときっぱりと別の対象を目指していくその過程は、欲求と行動が連鎖していく見事な流れを持ったものです。その見事な流れは一見ちぐはぐな断絶されたものに見え、「他者」として子どもを捉えるという視線は、このようなちぐはぐさを、大人には理解できないが子ども独自の秩序あるものだ、とすることで評価し、そしてそうすることによって子ども／大人の境界をより強化してきました。しかし、その場を共

有することで、子どもが見せる現象が引き起こすそのスピード感のようなものに捕らえられるとき、それは何も大人と子どもを分離するような子ども独自のものではなく、人間という存在が作り出す秩序として感じることでできるものではないでしょうか。それは遊びや生理的な欲求の表現においてだけではなく、風邪をひいたり幼児期の伝染病などにかかったときの経過のしかたにも見ることができます。そのような時の、病前・病中・病後の子どものばらばらに見える様々な欲求や行動が、身体の不調を経過させるためにうまく働いているところを見ると、やはりその見事さに「子ども」という小さな身体を持った人間への憧憬にも似た感覚を覚えることがあります。このような憧憬は「子ども」という独特の存在に向けられているというよりは、「人間」というものの作り出す見事な流れに対して向けられている、と見ることもできるのではないのでしょうか。その時、大人が子どもに対して距離をとって感覚するものとしてではなく、自らをその内に含む「人間」という存在の見事さに、私たちは「幸福」を感じているとも見ることができます。そしてそれは、「子ども」という人為的に括られた存在に対して持つ「幸福」感が人為的に「作られて」きたものである、と知識として受け取ることがいくらできたとしてもなお、子どもに幸福感をかきたてられ続けている、という不思議さを解き明かすひとつの視点となりうるのではないのでしょうか。子どもと大人という境界線を強化してきた「幸福」というものを、これを無化し、つないでいくもの、として見ていく可能性がここから開けてくるかもしれません。

3. 結びに代えて

以上の三つの観点からアプローチすることによって見えてきたのは、幸福や死生の問題に関して現代においてもなお支配的であるのは、「主体」が生きる・死ぬという死生観や、「健康＝幸、病＝不幸」という枠組みに基づく幸福観、自／他という二項対立を前提した上に成り立つ幸福観に依拠する言説だということである。このような言説を分析することを通して、これらの見方からは漏れ落ちていた、自と他のつながりのなかにある死生観や、関わり合いのなかで生じる幸福、与えられた状況で「なんとかやっていく」といった知恵のうちにある幸福感を含めて、幸福や死生について考えていくことの重要性が確認された。このような意味で、今回の研究成果を踏まえて今後は、例えば生老病死の捉え方や向き合い方はそもそも文化によって多種多様であったこと、そして各文化に生老病死をうまく受け入れたり、経過させたりする知恵が日常にあったらうということから、国や地域ごと、あるいは時代ごとの比較作業を通してそれらを明らかにし、そこから幸福や死生を、多様な様相のもとに捉えていくことが必要であると考え。